

折 伏 要 文 (2)

法華講夏期講習会 第二期(平成18年6月4日)

皆さん、おはようございます。

本日は、本年度の法華講夏期講習会の第二期に当たりまして、全国から大勢の方が御参集いただき、まことに御苦労様でございます。

この夏期講習会におきまして、御戒壇様のもとで修行せられるその功德と歓喜、これをもって皆様方には、これからの闘いの糧^{かて}としていただき、そして御命題達成の道を進んでいただきたいと思う次第であります。

私は、登座いたしまして、この夏期講習会を初めて迎えるわけではありますが、種々考えまして、今、一番大切なことは何か、今、宗門がなすべきことは何かと考えましたときに、やはりこれは「平成二十一年・『立正安国論』正義顕揚七百五十年」におけるところの御命題、つまり「地涌^{じゅ}倍増」と「大結集」へ向けて前進していくことが一番大切ではないかと思った次第であります。この「地涌倍増」と「大結集」という二つの御命題をよくよく考えてみますと、結局、これは「折伏をしていきなさい」という日頭上人^{ぎょめい}猊下の御命であったと思うのであります。

つまり「地涌倍増」というのは、これは文字通り折伏をしなければ達成できないわけでありまして、絶対条件が折伏であります。

また同時に「大結集」ということも、地涌倍増をしていかなければならないのです。地涌倍増の上に大結集が成立していくわけでありまして、その地涌倍増こそ、まさに折伏をもって達成していくということになるわけでありまして。

そのようなところから、私は本年度の講義といたしまして「折伏要文」、これをテキストにした次第であります。

皆様方も、指導教師や講師さんを含めたいろいろな方々から、「折伏しなければだめだ」というように指導や激励を受けているのではないかと思います。

しかるに、この折伏ということは、私見で勝手に言っているわけではなく、このテキストに載せてありますが、仏様である大聖人様が我々に対して、

「法華経の敵を見ながら置いてせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑ひなかるべし」(御書一〇四〇^ぎ)

と、こうおっしゃっているのです。折伏ということは、私たちにとって最も大切なことであります。そういう意味から本年度は「折伏要文」を^あ挙げて、私が勝手に言っているのではない、指導教師や講師さん、その他の方々が勝手に言っているのではなく、「仏様である大聖人様が私たちに命じてくださっていることなんだ」ということを、ぜひとも知っていただきたいと思ひまして、テキストに挙げた

次第であります。

テキストの五ページに『唱法華題目抄』の御文がありますが、ここまでを前回の第一期で拝読いたしましたので、本日はその次の『立正安国論』から拝読をしていきたいと思えます。

この『立正安国論』は、今を去る七百四十六年前、文応元(一二六〇)年七月十六日、大聖人様が御年三十九歳のときに、宿屋左衛門入道を介して時の最高権力者である北条時頼に提出をせられた国主諫暁の書であります。

大聖人様は『撰時抄』の中で、

「余に三度のかうみやうあり」(同 八六七)

とおっしゃっていますように、三度、国主を諫暁あそばされましたが、その最初の国主諫暁として提出されたのが、この『立正安国論』であります。

因みに「三度」と申しますのは、『立正安国論』の提出が一度目です。それから二度目は、文永八(一二七一)年九月十二日の竜の口の法難の直前に平左衛門を諫められたことです。そして、三度目は、佐渡配流から鎌倉にお帰りになられた文永十一(一二七四)年四月八日に、再び平左衛門に対して殿中で諫暁せられたわけです。このように三回、大聖人様は国主諫暁をせられておるのですが、その第一回目の時に提出せられたのが『立正安国論』であるということです。

この『立正安国論』というのは、大聖人様が、日本国の天下万民が謗法の失によって、今生には天変・地天・飢饉・疫癘、あるいは自界叛逆・他国侵逼の難に遭い、未来には無間大城に墮ちて永劫にわたって阿鼻の炎にむせぶ、このような有り様を悲嘆せられて、一往は和光同塵して仏様の弟子として、再往は末法の御本仏として、大慈大悲をもって身命を賭して北条時頼をはじめとする万民を諫めあそばされたところの、いわゆる折伏諫暁の書なのです。

『立正安国論』は、全体が客と主人の問答形式になっており、十問九答の問答から組み立てられております。ですから、問いが十で答えは九つなのです。けれども、最後の十番目の客の問いは、そのまま主人の答えになっているのであります。

簡単にその内容を申しますと、まず初めに正嘉元(一二五七)年八月二十三日の大地震をはじめ、近年より近日に至るまで頻発する天変・地天・飢饉・疫癘の惨状を見て、その原因は何か。それは世の中の人たちが正法に背き悪法を信じていることによって国土万民を守護すべきところの諸天善神が去って、悪鬼魔神が便りを得て棲み着いているためであるとされ、そこで金光明経や大集経等を引かれて、正法を信ぜず謗法を犯すことによって三災七難が起こるのであると理由を述べられるのです。そして、これら不幸と混乱と苦悩を招いている一凶は、ひとえに法然の『選択集』、すなわち念仏にあると断ぜられるのであります。

そして、この大謗法である一凶を退治して、正善の妙法を立てるとき、国中に並び起こるところの三災七難等の災難は消え失せ、度重なる国家の危機も消滅して、安寧にして磐石なる仏国土が出現すると仰せられるのです。しかし、もしも正法に帰依しなければ、七難のうち未だ起きていないところの自界叛逆・他国侵逼の二難が必ず起こると、このように予言せられて、そして速やか

に実乗の一善に帰するようにおっしゃっておられるのであります。

『立正安国論』の予言の大要というのは、自界叛逆難と他国侵逼難の二つであり、また対告衆^{たいごうしゆ}は一往、北条時頼であります。これは北条時頼だけに提出したのではなくして、一切衆生に對して与えられたところの諫言書であると拝せられるのであります。また、本抄の中に、

「如かず彼の万析^しを修せんよりは此の一凶^かを禁ぜんには」(同 二四一頁)
とあり、一往は専ら^{もつぱ}法然の謗法を破折されていますが、再往元意^{さいおうがん い}の辺は、広く諸宗を破折しておられるのであります。

次に『立正安国論』の「立正」とは何かと言え、まさしく末法万年の闇を照らして弘通するところの本門の本尊と戒壇と題目の三大秘法を、正法治国、国土安穩のために立てることです。そして「安国」とは、一往は日本国を指しますが、再往は全世界、一閻浮提^{いちえんぶだい}を安んずるといふ意味であります。

先ほど「如かず彼の万析を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには」の御文を挙げましたが、この御文を日頭上人猊下は現代に約せられまして、

「『此の一凶を禁ぜんには』というところの一凶こそ、まさに創価学会であります」(大白法 六三七号)

と仰せられ、三宝破壊の大謗法に対しては、断固として破邪顕正の折伏を行じていかなければならないことを御指南あそばされておるのであります。その上からも我々は、折伏をもって^{しょう}正を立て、そして国を安んずるといふことが大切であるということになるのであります。

では、テキストをご覧ください。

立正安国論

倩^{つらつら}微管^{びかん}を傾け^{いささか}聊^{いささか}経文^{けいぶん}を披きたるに、世皆正に背き人^{みな そむ ことごと}悉く悪に帰す。故に善神国を捨て、相去り、聖人所^{せいじん}を辞して還らず。是^{こゝ}を以て魔来たり鬼来たり、災起り難起り。言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず(御書二三四頁一三行目)

ここに「倩微管を傾け聊経文を披きたるに、世皆正に背き人悉く悪に帰す」とありますが、この「微管」というのは、細い管ということでありまして、つまり細い管の穴から空を見ても一部分しか見えないように、狭い見解という意味であります。

しかるに、このところは謙遜^{けんそん}の意味から、このように述べられているわけです。そもそも仏様は微管ではないのですけれども、一往、謙遜の意味を込めてこのようにおっしゃっているわけです。つまり、少しばかり経文を開いてみると、皆が「正」に背いて、多くの人たちが「悪」に帰しておるということなんです。

この「正」というのは、正しい法ということですから、これは大聖人様の三大秘法の仏法以外にはないわけです。それから「悪」とは何かと言え、これはそれ以外の邪義邪法の教えです。

結局、いろいろと考えてみると、世の中が乱れてくる原因というのは、皆が正しい法に背いて、多くの人たちが邪義邪法、その間違った教えを信じ込んでしまっているところにあるということです。

「故に善神国を捨て、相去り、聖人所を辞して還らず」。この「善神」というのは、梵天や帝釈というような、正法を行ずる者を守護する用きとなる神々のことでもあります。つまり、自然の力が衆生を守る用きを指して善神と言っているのです。

しかるに、この御文の意味は、人がことごとく悪に帰することによって、衆生を守る用きをする善神や聖人といった方々が全部その所を去ってしまい、それらの用きがなくなってしまうということです。

したがって、その後には「是を以て魔来たり鬼来たり、災起り難起る」、今度は魔や鬼が来るということです。

「魔」とは、煩惱をはじめとする、衆生の心を悩乱させる用きをするもののことです。これは奪命者とか、破壊などとも言います。

有名なところでは、三障四魔というのがありますが、この四魔というのは、陰魔・煩惱魔・死魔・天子魔の四つです。こういう魔が起きてくるわけです。

次に「鬼」が来るということです。この鬼というのは、夜叉や羅刹、餓鬼といった餓鬼界に住する者たちであります。これらも人々の功德や命を奪い、思想の混乱や天変地天を起こす原因となる、そういう用きをするのであります。よって、このようなことから災難が起きるのであるということです。

次に「言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず」とあります。これはどういうことかと申しますと、今、述べたように、世間の多くの人たちが正に背き、そして悪に帰するから様々な災難が起こるといふ、この大事なことを言わなければならない、それを恐れなければならないということです。つまり、言って罪のまぬかるべきを黙ってはいならない、折伏しなければならないということです。

今日の社会情勢を見てみますと、様々な悲惨な事件が起きています。新聞を見ても、その中に殺人事件などの悲惨な事件が報道されない日はないくらいです。よって、これを見た私たちは、安閑としてはいけません。まさに大聖人様が「言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず」とおっしゃる通り、多くの人たちに折伏をしていく、このことが今、私たちにとって最も大事なことであり、こういうことになるわけです。

では、次の御文にまいります。

立正安国論

「嗟呼悲しいかな如来誠諦の禁言に背くこと。哀れなるかな愚侶迷惑の麤語に随ふこと。早く天下の静謐を思はゞ須く国中の謗法を断つべし」(御書二四七頁一行目)

ここに「嗟呼悲しいかな如来誠諦の禁言に背くこと」とある「誠諦」というのは、真実で誤りがなく、永遠に変わらないということで、これは仏様の言葉を指すのです。

それから「禁言」というのは、仏様の誡めの言葉です。ですから、これは仏様の真実の言葉や誡めに背くことという意味であります。

「哀れなるかな愚侶迷惑の麤語に随ふこと」。この「愚侶」とは、正法を信ぜずに邪法を修行し

ておるような愚かな僧侶のことです。

また「僞語」というのは、粗雑で荒っぽい言葉ということで、これは大乘の教えを「妙」というのに対して、小乗の教えなどは「僞」と言います。つまり粗末などという意味で、そのように譬えられているのであります。ですから、正しい真理、真実というものを解き明かしていないことを僞語というのであります。

そこで「哀れなるかな愚侶迷惑の僞語に随ふこと」とは、ここでは特に法然の『選択集』によって、法華経の正しい道を忘れて仏様の禁言に背き、法然の邪義邪宗に誑かされている姿、これを言っているわけです。

当時、日本の国では邪義邪宗の中でも特に念仏が非常に盛んだったのです。この念仏の間違った教えによって、例えば、法然の姿を木に彫刻して仏様のように拝んだり、あるいは画像に描いてそれを崇めてみたりしていたのです。さらに法然の『選択集』を、今で言う印刷ですが、版木で刷ってそれをばらまいたりして邪義を弘めているような状況があったのです。

また、あるいは印相を変えてしまうようなこともしたわけです。この印相というのは、仏像を見ると判りますが、釈迦如来や大日如来などの仏像は皆、手で印を結んでいますね。あれは、その仏菩薩の内証・本誓を表しているわけです。それを印相と言うのです。そこで、本師であるお釈迦様の印相を阿弥陀仏の印相にすり替えてしまうようなこともしたわけです。つまり、念仏の邪義というもの、そこまできてしまうということです。こういうことが実際にあったのであります。

さらには、薬師如来の堂を阿弥陀如来の堂に変えてしまうとか、法華経の写経をやめてしまって、それを阿弥陀経の写経に変えてしまう。また、天台大師の講というものを行っていたのを、念仏の善導の講に変えてしまうなど、そういったものが、どんどん念仏によって廃れ、踏みにじられていく状況が存することを、ここで述べられているのです。

皆が仏様の真実の言葉や誠めの言葉に背き、そして法然のような愚侶迷惑の僞語に惑わされ、従っていることが何と悲しいことであろうかと仰せられているのであります。

ですから、次のところに「早く天下の静謐を思はゞ須く国中の謗法を断つべし」と、このようにおっしゃっているのです。

大聖人様は、先ほどの念仏の者たちの行う様々な悪事に対して『立正安国論』の中で、
「是破仏に非ずや、是破法に非ずや、是破僧に非ずや。此の邪義は則ち選択に依るなり」
(御書 二四七頁)

と、そのようなことはすべて仏・法・僧の三宝破壊の姿であると御教示あそばされております。

この三宝破壊の姿は、まさに今の池田創価学会と同じなのです。その三宝破壊の姿が、当時の念仏の者共にあったのです。ですから、大聖人様は「早く天下の静謐を思はゞ須く国中の謗法を断つべし」と、このようにおっしゃっているわけなのです。まさに正を立てて国を安んずるという精神が、ここにもあるわけです。

これを現代に約して言うならば、私たち一人ひとりに対して「折伏をしなければだめですよ」と、このようにおっしゃっているのであります。

では、次にまいります。

立正安国論

汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり、仏国其れ衰へんや。十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壊れんや。国に衰微無く土に破壊無くんば身は是安全にして、心は是禅定ならん。此の詞此の言信ずべく崇むべし(御書二五〇ノ四行目)

この「信仰の寸心」の「寸心」とは、いささかの志、小さな志という意味でありまして、偏った小さく狭い信仰ということになるわけです。その寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰しなさいと仰せであります。

日寛上人は、

「当に知るべし、『寸心を改めて』とは即ち是れ破邪なり」(日寛上人御書文段 四九ノ)

と、邪を破することであるとおっしゃっています。それから、

「『実乗に帰せよ』とは即ち是れ立正なり」(同)

と、実乗の一善に帰するという事は、正を立てることであると仰せです。さらに、

「『然れば則ち三界』の下は安国なり」(同)

と仰せであります。

この「実乗の一善に帰せよ」の「実乗」とは、文字通り権大乘に対しての実大乘ということになります。それから「一善」とは、一つの善、唯一の善ですから、これは最高の善という意味で、一往は法華經のことを指すのでありますけれども、再往、大聖人様の御正意は、すなわち文上の法華經ではなくして、法華經文底独一本門の妙法蓮華經にして三大秘法の随一である、大御本尊様に帰命することが「実乗の一善に帰する」ということになるわけです。

ですから、一刻も早く信仰の寸心を改めて実乗の一善たる三大秘法の随一、本門の本尊に帰依するならば「然れば則ち三界は皆仏国なり」と仰せられているのです。

この「三界」というのは欲界・色界・無色界のことで、これは生死の迷いを流転する六道の凡夫の境界・住処を三つに分けて三界と言っているのであります。

そして「仏国其れ衰へんや。十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壊れんや」。つまり、この三界が皆仏国となるならば、どうして衰微することがあろうか。十方の国土は、ことごとく宝土である。宝土であるならば、どうして壊れることがあろうかと仰せです。

それから「国に衰微無く土に破壊無くんば身は是安全にして、心は是禅定ならん」。つまり、国に衰微がなくなり、国土が破壊されることがなくなれば、その身は安全になり、心も動揺することがなくなって、落ち着いて日々の生活が送れるようになるということです。

「此の詞此の言信ずべく崇むべし」。つまり、この言葉は心から信ずべきであり、崇むべきであると、このように仰せになっているわけでありまして。ですから、大聖人様はここに「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ」と、このようにおっしゃっているのであります。

我々は今、大聖人様の御言葉を折伏実践の上に示して、御理想とせられる立正安国の実現を

図っていかなければならないということなのです。「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ」ということを、我々は折伏という実践行動をもって示していく、これが大事なのであります。

折伏というのは、仏様のなされることを、仏様の使いとして我々がそれを行じていくわけです。ですから、これは尊いことなのです。法華経の中にも、

「^{まさ}に知るべし、^こ是の人は^{すなわ}則ち^{つかい}如来の使なり。如来の^{しよけん}所遣として、如来の^じ事を行ずるなり」(法華経 三二一頁)

と示されております。仏様がなされることを、我々が仏様に代わって行じていくということですから、折伏というのは、どれほど尊いことかということなのです。まさに、

「力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし」(御書六六八頁)

ということで、その一言一言が全部、相手を救う慈悲の言葉になってくるのです。ですから、折伏は尊いのです。尊いから折伏を行じている人には功德があるのです。

それは当然のことなのです。仏様のなされることを、仏様に代わって、仏様の使いとして行ずるわけですから、それは仏様にお褒めいただくところなのです。御本尊様の照覧が必ずそこにあるのです。ですから我々は、この御言葉をよく拝して折伏に励んでいかなければならないということになるのであります。

それでは、次の御文にまいります。『教機時国抄』。

教機時国抄

「^{どつく}謗法の者に向かつては一向に法華経を説くべし。毒鼓の縁と成さんが為なり。例せば不輕菩薩の如し」(御書二七〇頁一行目)

大聖人様は、このように「^{いっこう}一向に法華経を説くべし」とおっしゃっているのです。「一向」というのは、真っ直ぐということなのです。我々は何しろ、苦しんでいる人、悩んでいる人、不幸な人を見たら必ず折伏しなければいけないのです。一向に法華経を説くのです。

よく折伏ができない理由の中に、「なかなか下種先がなくて」と言う人がおりますが、そんな^{のんき}暢気なことを言っていてはだめなのです。^{となり}隣のおじさんやおばさんを折伏していますか。親戚や会社の同僚をはじめ友人や知人など、折伏すべき方々はたくさんいます。

今、日本の人口はおよそ一億二千万人です。日蓮正宗の信徒数は、まだ一億二千万人もいないのですから、周りを見れば下種すべき人はたくさんいるのです。ですから「折伏をする相手がいなくなってしまった」なんていうのは、自分が勝手に思っているだけなんですね。それが違うのです。

折伏は、やはり実践しようと思えばできるのです。結局、己心の魔に負けてしまって「あの人は無理だ」と、自分で決めつけてしまっているだけなのです。そのような意識であってはなりません。ですから、やはり一向に法華経を説くということが大事なのです。

折伏をすると、相手は耳を^{ふさ}塞ぎます。なかには、それこそ非難中傷、時には本当に迫害を受けるようなことがあります。しかし、それは全部、「^{どつく}毒鼓の縁と^な成さんが^{ため}為なり。例せば^{ふきよ}不輕菩薩の如

し」と、このようにおっしゃっております。

この「毒鼓の縁」ということは、第一期の講義の時に説明をしましたが、これは毒薬を太鼓に塗^ぬり、それを大衆の中で打つことによって毒が蔓延^{まんえん}し、その毒に当てられて皆、死んでしまうということ、正法を聞こうが聞かまいが、その法を聞いたことが縁となつて得道することができるということに譬^{たと}えているわけで、これは逆縁成仏のことを言っているのです。

それと同じように「毒鼓の縁と成さんが為なり。例せば不輕菩薩の如し」とは、妙法蓮華經の尊さを聞くと、自分では耳を塞ごうが何をしようが、その音を聞くことによって、今度は逆に成仏をしていくということを言っているのです。これが逆縁成仏ということで「例せば不輕菩薩の如し」と、こうおっしゃっているわけです。

この「不輕菩薩」は威音王仏の滅後、像法時代に出現をしまして、一切衆生に仏性^{ぶつしょう}があるとして二十四字の法華經というのを説いて衆生を礼拝^{らいはい}し、軽んじなかつたので不輕菩薩というのであります。

その二十四字の法華經とは、

「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏(我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし)」(法華經 五〇〇頁)

という『常不輕菩薩品第二十』に説かれる文であります。

この不輕菩薩に礼拝をされた人たちは、皆、不輕菩薩を軽んじて杖木瓦石の難を加えるわけです。しかし、不輕菩薩は最後まで屈服することなく礼拝を全^{まっ}うして、その功德によって成仏することができたのであります。そして、このとき不輕菩薩に迫害を加えた衆生も、一度は地獄に墮ちたけれども、逆縁の功德によって後に成仏をすることができたということです。これが『常不輕菩薩品第二十』の、毒鼓の縁について説かれる不輕菩薩の話であります。

もう一つ毒鼓の縁についての話を紹介いたしますと、大聖人様が『上野殿御返事』の中に逆縁成仏の譬え話を説いておられるのです。では、御書を読みますと、

「天竺^{てんじく}に嫉妬^{しつと}の女人あり。男をにくむ故に、家内の物をことごとく打ちやぶり、其の上にあまりの腹立^{はらだち}にや、すがたけしきかわり、眼は日月の光のごとくかがやき、くちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて、年来男のよみ奉る法華經の第五の巻をとり、両の足にてさむざむにふみける」(御書 一三五八頁)

とあります。これは天竺の女の人の話ですが、あまりに嫉妬心が強いこの女の人は、亭主が憎いあまりに、亭主が日頃読んでいた法華經を散々^{あしげ}に足蹴にしてしまったのです。ここに「すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて」とありますから、おそらくすごい形相^{ぎようそう}で踏みつけたのでしょう。そしてその後

に、「其の後命つきて地獄にをづ。両の足ばかり地獄に入らず。獄卒鉄杖をもつてうてどもいらず」(同頁)

と。つまり、死んでしまった後に、その罪によって地獄に墮ちることになったのです。けれども、獄

卒が女の人を地獄に突き墮とすために鉄杖で打つのですが、身体の方は入っていくけれども、足の方はなかなか地獄に入っていないのです。このことについて大聖人様は、

「是は法華經をふみし逆縁の功德による」(同一三五九頁)

と。つまり、法華經を足蹴にしたその足だけが、逆縁の功德によって地獄に入っていかなかったと仰せであります。これが逆縁成仏ということなのです。

ですから、我々が折伏をするときには、相手は耳を塞ぎ、非難中傷をする。時には、それこそいろいろな迫害に遭うこともあるわけです。それでも逆縁成仏を結ぶことが大切なのです。順縁と逆縁というのがありまして、素直に入信する方もいるけれども、強く反対をされてひどい目に遭うこともあるかも知れない。けれども、御書に説かれるように、御本尊に縁をさせていくことが尊いのです。

「一切衆生 悉有仏性」ですから我々は皆、仏性を持っているのです。けれども大聖人様が、「縁とは三因仏性は有りいへどと雖も善知識の縁に値あはざれば、悟らず知らずあら頭はれず。善知識の縁に値へば必ず頭はるが故に縁と云ふなり」(同一四二六頁)

と仰せのように、たとえ仏性を持っていても「善知識の縁」、つまりすばらしい縁に値わなければ成仏をしないのです。仏性が仏性としての用はたらきをしない。ですから、縁に触れるということが大事なのです。そこで、その縁に触れる場合には、順縁もあるし、このように逆縁もあるということです。

ですから、不軽菩薩は「あなたは必ず仏様に成れますから敬います」と言たんぎょうらいはいって但行礼拝をするわけです。けれども、それを聞いた人々は不軽菩薩を軽蔑し、杖木瓦石をもって迫害をするのです。それでも不軽菩薩は何回も何回も飽くことなく二十四字の法華經を説くのです。そして、その功德によって不軽菩薩は仏と成り、同時に不軽菩薩を迫害した逆縁の人たちも、その罪によって千劫という長い間、地獄に墮ちるけれども、その後において再びその縁によって救われていくのです。

ですから我々は、相手が耳を塞ごうが何をしようが、この妙法蓮華經が尊いということを語っていく。つまり「この御本尊様以外に幸せになる道はありませんよ」ということを、きちっと言わなければだめなのです。自分で勝手に「あの人は言ったってだめよ」などと決めつけてはいけません。それでは「だめなのは、あなた方ですよ」となってしまいます。ですから、自分勝手な解釈をしないことです。大聖人様の御妙判をよく拝すれば、いかにこの逆縁ということが、大切な一つの縁であるかということが、よく判ると思います。

仏法では、因果の理法ということをお説きしますが、それはただ因と果をお説きだけではないのです。その間に縁があるのです。因果だけであったならば、機械的に、悪いことをした者は悪い結果だけというようになってしまいます。そうすると末代の衆生は皆、過去世にいろいろな因縁を作ってきた荒凡夫あらですから、成仏をすることができなくなってしまいます。けれども、その因果の間に縁があるわけです。その最高の縁が御本尊様であるということです。

この御本尊様という最高の縁に触れることによって全部が転迷開悟してくるのです。「煩惱即菩提 生死即涅槃」と開かれてくるのです。提婆達多だいばだつたや竜女の成仏なども同様でしょう。ですから、

折伏というのは、相手が聞こうが聞まいが、きちんと下種結縁していかなければだめなのです。

したがって皆様方には、大聖人様の「謗法の者に向かっては一向に法華経を説くべし。毒鼓の縁と成さんが為なり。例せば不軽菩薩の如し」との御妙判を心肝に染めていただきたいと、このように思うのであります。

では、次にまいります。

持妙法華問答抄

「一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ、五十展転の随喜は八十年の布施に勝れたり」(御書二九七〜九行目)

この「一念信解」とは、『寿量品』に説かれた仏寿長遠を一念に信解して仏様に帰命するということでもあります。法華経の『分別功德品第十七』の中には「四信五品」ということが説かれておりまして、これは「現在の四信」と「滅後の五品」ということではありますが、その「現在の四信」の第一番目に説かれているのが一念信解であります。これは法華経の信心修行の位の中で、初信の位になるわけであります。

「一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ」。この「五波羅蜜」とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧という六波羅蜜のうちの最後の智慧波羅蜜を除いた五つのことでもあります。すなわち、初信の位である一念信解の功德は、その五波羅蜜を修行する功德に百千万倍も勝れているということです。つまり、妙法の功德というものは、これほど深く廣大無辺であるということをおっしゃっているのです。

そこで、この後が大事なんですね。「五十展転の随喜は八十年の布施に勝れたり」と、このようにおっしゃっているのであります。この「五十展転」ということは、法華経の『随喜功德品第十八』の中に説かれております。これは、仏の滅後に法華経を聞いて随喜して人に伝え、その人もまた聞き終わって随喜をして次の人に伝えるというように、順次に伝えられて、そして五十番目に伝えて聞いて随喜した人の功德というのは、四百万億阿僧祇の世界の衆生に、八十年にわたって金・銀・瑠璃などの珍宝を供養して阿羅漢果を得させる功德よりもはるかに勝れていると、このように説いているわけです。

五十番目のその人は自解のみ、つまり聞いただけで次の人に説かない、化他の行をしないわけですから。それでも五十展転して伝えられてきたところの法の功德というものは、それほど大きく勝れているということです。ましてや自行化他の修行をしている一番目の人の功德は、どれほど絶大であるかということで、これはつまり折伏の功德を説いているわけです。すなわち、化他の功德を欠く五十番目の人の功德を説いて、第一番目の自行化他を具する者の功德の絶大なることをおっしゃっているのです。

この折伏というのは、最高の慈悲行であり報恩行であり、仏道修行なのです。私たちは、折伏をすることによって過去遠々劫以来の様々な罪障というものを全部消滅していけるのです。ですから、折伏をする人の功德というのは、それほど絶大であるということでもあります。

逆に、折伏をしないというのは、功德がないということになるのです。否、むしろ大聖人様は、

「法華經の敵を見ながら置いてせめずんば、師檀しだんともに無間地獄むけんは疑ひなかるべし」(御書一〇四〇ぎ)

と、折伏をしなければ師である僧侶も檀那も共に無間地獄は疑いないとおっしゃっているのです。ですから、我々の修行というのは自行化他でなければならぬということをよく知っていただきたいと思います。

次に、

持妙法華問答抄

「願げんはくは「現世安穩げんぜあんのん後生善処ごしょうぜんしょ」の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後世ろういんの弄引ろういんなるべけれ。須すべからく心いつを一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勸めすすんのみこそ、今生人界の思出ししゅつなるべき」(御書三〇〇ぎ八行目)

この「願はくは『現世安穩後生善処』」というのは、法華經の『藥草喻品第五』の文でありまして、仏様の法力を説いたものであります。すなわち、南無妙法蓮華經を信受する衆生の三世にわたる功德を述べておりまして、現世では安穩なる境界となり、未来世にも必ず善処に生まれ、妙法を受持することができる、これが「現世安穩後生善処」の意味であります。

そこで「願はくは『現世安穩後生善処』の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後世の弄引なるべけれ」とあるのは、その功德のある妙法を持つことこそ、ただ今生における真の名聞であり、後世の弄引であるということです。

この「弄引なるべけれ」の「弄引」とは、手引きという意味です。つまり後世には成仏の手引きとなる、すなわち妙法信受の因が後世における成仏の結果を決定するのであると、このようにおっしゃっているのです。

したがって「須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勸めんのみこそ、今生人界の思出なるべき」と仰せであります。

我々は人間に生まれてきて、そして何をすべきなのか。これには、いろいろな考え方があるけれども、やはり世のため人のために尽くしていくということが大切なのであり、自分のためだけに生きていくというのは、これは小乗の考え方なのです。小乗にこだわった人々は、仏様から「二乗根性」といって嫌われるのです。二乗の人たちは、仏道修行において自分のためには一生懸命に血にじの滲むような努力をするけれども、他の人のためには何も行わないのです。したがって、仏様から「お前たちは絶対に成仏をしないぞ」と言われるわけです。

我々が折伏をするのは、やはり一切衆生救済という慈悲行に徹するからであり、世のため、人のためなのです。そこに尽くしていくところにまた、己おのれに尽くす因がこ籠められてくるのです。自分のことばかりを考えて行動していると「お前は、それでは永遠に成仏しないぞ」と、お叱りを受けることになってしまうわけです。

今、世間がこんなに殺伐さつぱつとしているのは、皆が自分のことしか考えないからです。自分の欲望のためだったら他人ひとをも殺してしまうような、そんな慈悲の心のかけらもなくなってしまう人が大勢いるわけです。これは、みんな貪とん・瞋じん・癡ちの三毒わざのなせる業です。

この貪・瞋・癡の三毒の煩惱を菩提に換えていくのが妙法なのです。まさに「現世安穩後生善処」の妙法です。この妙法を自らが率先垂範そっせんすいはんして多くの人たちに下種結縁し、自分が折伏した人には、また折伏することを教えて次の人に展転していくということが大切なのです。それをやらなければ、我々自身の成仏もおぼつかないのです。自分自身のためだけに、いくら題目を唱えてもだめなのです。やはり私たちは、世のため、人のために尽くしていくことが大事なんですね。

世の中には、極悪非道な人ばかりでなく、本当に立派な人たちもいます。時々テレビなんかを見ると、子供たちに対して「大きくなったら何になりたいですか」と質問をしたりしていますね。すると、立派なことを言っている子供たちがたくさんいますね。そういう子供たちが、いつの間にか世の中に狂わされて、おかしくなってしまうのです。これは教育の欠如と言え、そうかも知れませんが、根本的には、この妙法信受の功德、妙法蓮華經の尊さを教えていくということを我々が怠おこたっていると、そういうことになってしまうのです。我々にはまた、そういう大事な役目があるということ、ひとつよく知っていただきたいと思います。

まさに、御妙判に「妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後世の弄引なるべけれ。須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勧めんのみこそ、今生人界の思出なるべき」とお示しの通り、今生人界の思い出を立派に作っていくということが大事ではないかと思ひます。

次に、

南条兵衛七郎殿御書

「いかなる大善をつくり、法華經を千万部書写し、一念三千の觀道を得たる人なりとも、法華經のかたき敵をだにもせめざれば得道ありがたし。たとへば朝につかふる人の十年二十年の奉公あれども、君の敵知をしりながら奏そうしもせず、私にもあだ怨まずば、奉公皆失うせて還かえつてとがに行なはれんが如し。当世の人々は謗法知の者としろしめすべし」(御書三二二三一八行目)

ここに「いかなる大善をつくり、法華經を千万部書写し、一念三千の觀道を得たる人なりとも、法華經のかたきをだにもせめざれば得道ありがたし」とあるのは、先ほども申し上げたように、自分のためだけに一生懸命にやってもだめだということ、ここでもおっしゃっているのです。

「いかなる大善をつくり」とありますが、どんなに善いことを行っても得道することがないというのは、これは本当の大善ではないからです。同じ善でも小善から大善までいろいろな善があるわけです。ですから、自分では大善だと思ってみても、妙法という本当の大善から見れば、それは小善でしかないのです。大聖人様が、

「善なれども大善をやぶる小善は悪道に墮つるなるべし」(御書 三二三三)

と仰せのように、法華經の大善を敵に回すような小善は悪なのです。それと同じように「いかなる大善」といっても、法華經の敵も責めない大善は、それは本当の大善ではないのです。本当の大善というのは、この妙法を信受し、自行化他の修行に励む、これが大善中の大善なのであります。

したがって、法華經を千万部書写したとしても、あるいは一念三千の觀道を得たとしても、法華經の敵を見て折伏をしなければ、その人は成仏をしないということ、大聖人様がはっきりとおっしゃっているのです。

最初にも申し上げましたが、皆さん方も「折伏をしなければだめですよ」と、よく言われるでしょう。なぜ、そのようなことを言われるのかと思うかも知れないけれども、それは誰かが勝手に言っているのではなく、御本仏大聖人様がおっしゃっているのです。本当の意味で自分自身が幸せになりたいければ、折伏をすることです。世のため、人のために尽くしていく、そうすれば必ず幸せになれるのです。皆さん方には、このことをよく知っていただきたいと思います。

次のところに、その譬えといたしまして「たとへば朝につかふる人の十年二十年の奉公あれども、君の敵をしりながら奏しもせず、私にもあだますば、奉公皆うせて還つてとがに行なはれんが如し。当世の人々は謗法の者としろしめすべし」とあります。これは朝廷に仕える者が、朝廷の敵である者を見ながら、知りながら放って置いては、それまでの奉公が皆失せて、かえってそれは失となるということをおっしゃっているのであります。

それでは、時間がまいりましたので、本日の講義は、このところまでといたします。

大聖人様の御書というのは、我々に警告を与え、忠告を与え、そして我々に成仏の道を示してくださっているわけです。ですから、テキストの残りの部分は、自宅に帰ってから読んでください。一項目でも一ページでも構いませんから、毎日、読んでください。そうすれば「ああ、折伏をしていかなければいけない」「折伏することが末法の修行なんだ」「我々の仏道修行というのは折伏すること」「自行化他にわたる信心が大切なんだ」ということが、よくお判りになると思いますので、皆様方には、どうぞお帰りになりましたら、これを読んでいただきたいと思います。

取り留めのない話になってしまいましたが、以上をもちまして私の話を終了いたします。